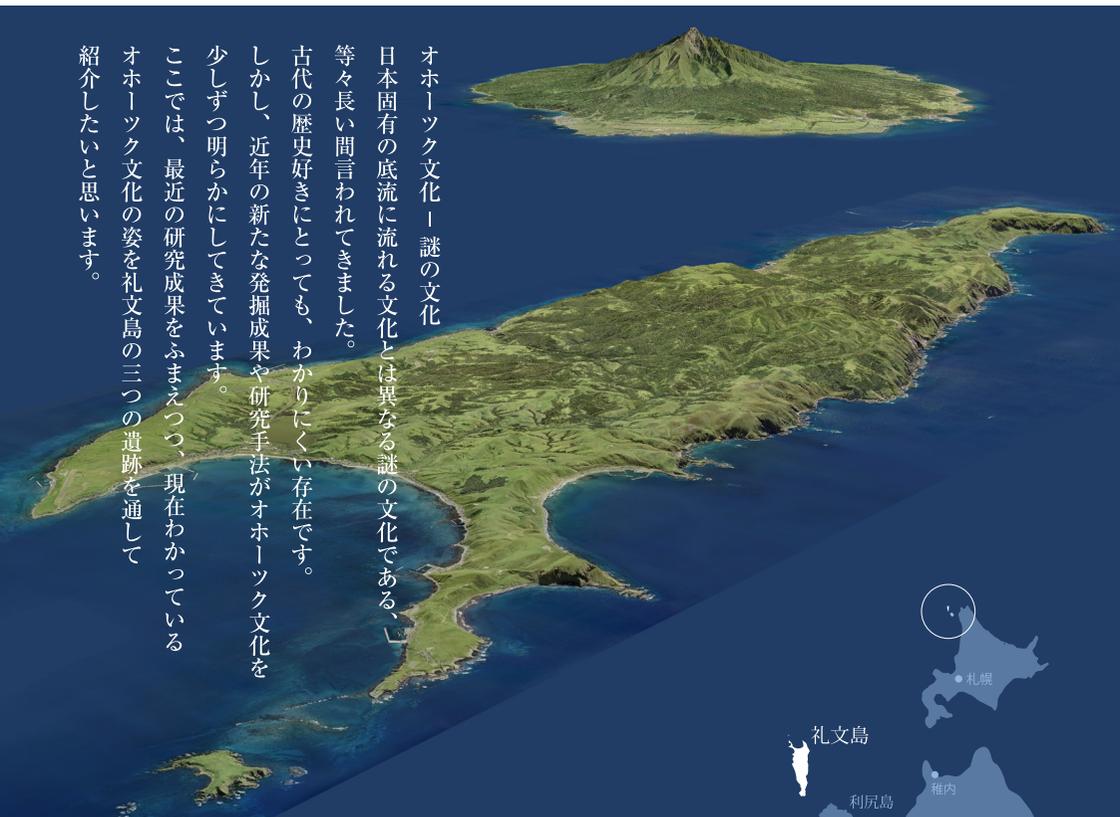


# 礼文島

オホーツク人の  
最初の生活・交易拠点であった

# 日本海北部の オホーツク文化



オホーツク文化―謎の文化  
日本固有の底流に流れる文化とは異なる謎の文化である、  
等々長い間言われてきました。  
古代の歴史好きにとっても、わかりにくい存在です。  
しかし、近年の新たな発掘成果や研究手法がオホーツク文化を  
少しずつ明らかにできています。  
ここでは、最近の研究成果をふまえて、現在わかっている  
オホーツク文化の姿を礼文島の三つの遺跡を通して  
紹介したいと思います。

## オホーツク文化のヴィーナスは、 オホーツク人の精神世界を物語る

礼文島北部船泊湾沿岸の砂丘上に遺跡から様々な遺物が出土することは古くから知られてきました。その中にとても神秘的な遺物があります。それは『歯牙製女性像』でオホーツク文化のヴィーナスとも呼ばれる遺物です。この種の遺物は、明治34年に利尻島で発見されたのを皮切りに、北海道内では根室や網走などでも出土しており、現在12体が知られています。

礼文島では、<sup>じゅうば えざわ</sup>重兵衛沢遺跡及び<sup>かんざせ</sup>神崎遺跡採集品と浜中2遺跡出土の3体の女性像、さらに、神崎遺跡採集の熊を模した動物像1体が見つかっており、浜中2遺跡出土の女性像を除く3体の資料は、昭和47年に北海道の有形文化財に指定されています。

これらの遺物は全てオホーツク文化に属するもので、<sup>ひとがた</sup>人形や熊以外にもシャチや鯨など海の動物を模したのももあり、オホーツク人の精神世界を物語る貴重な遺物と言えます。



礼文島出土の  
歯牙製女性像及び動物像



## ●礼文町郷土資料館



香深港フェリーターミナルから徒歩1分の町民活動総合センター（ビスカ21）に併設され、重要文化財である船泊遺跡出土品を始め、島の自然や歴史に触れる展示品を公開しています。

礼文町香深村字ワウシ  
礼文町町民活動総合センター内  
TEL 0163-86-2119 (礼文町教育委員会)  
開館期間／5月1日～10月31日  
休館日／5月は月曜日 (GWは無休)  
6月～9月は無休  
10月は月曜日





礼文島では、縄文時代からアイヌ文化期まで各時代の遺構が残されています。これは、最北の気象が生活環境に厳しさをもたらしていたのではなく、古代の人々にとっても今を生きる人々にとっても、豊穡の海にかこまれた豊かな島であることを教えてくれています。

## —オホーツク文化— 北海道在来文化と 本州の文化との関係は どうだったのか

本州とは異なる北海道独自の時代  
—オホーツク文化を語る前提として

今から一万五千年前から約一万年もの間、日本列島をくまなくおおった縄文文化は、大陸からの農耕文化の伝播によって大きく変容します。弥生文化は稲作を基盤とし、鉄器・青銅器といった新たな道具を導入しつつ、九州から東北北部まで広がって行きました。

青森まで稲作が到達し、水田が作られるようになったころ、北海道はどのような文化だったのでしょうか。北海道では現在まで稲作が行われた痕跡は見つかっていません。また、最も一般

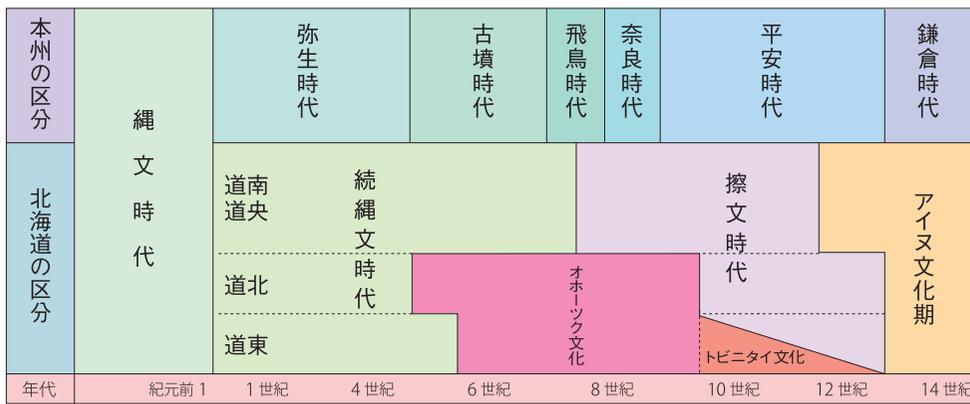
北海道では独自の文化が成立し、近世のアイヌ文化期まで続いていくこととなりますが、その中にひととき異なる彩を放つ古代文化があります。それがオホーツク文化です。アイヌ文化にも一定の影響を及ぼしたとも言われるオホーツク文化とは、一体どのような人々によってもたらされ、繁栄し、衰退していったのでしょうか。北海道と本州北部、そしてサハリンなど北方地域との関係の中から探ってみましょう。



的な道具である土器についても、弥生土器のように縄文がない土器ではなく、縄文時代と同じく縄文が残されています。したがって、北海道では弥生文化の基盤となる稲作が普及せず、縄文時代と同様に狩猟と採集が行われていた時代でした。この時代を続縄文時代と呼びます。この時代から、本州と同じく移り変わってきた北海道の歴史が異なる道を歩むこととなります。

続縄文時代が終わりに、次の新たな時代へと移行するのは七世紀前後の飛鳥時代以降、律令国家として国の形が変容していくころ、北海道ではカマド付き住居や雑穀栽培など、古墳文化に強く影響を受けた擦文文化が成立します。道具の面でも、土師器の影響により土器から縄文がなくなり、鉄器の普及による石器の急激な減少など、本州との密接な関係・影響により大きく変化していきました。

このように、本州の弥生時代以降、





月岡芳年による絵巻「大日本名將集 阿部比羅夫」 明治初頭

### 偽書ともいわれた『日本書紀』。そのなかに登場する肅慎とは

#### 阿部比羅夫はオホーツク人と戦ったか

『日本書紀』に「阿部比羅夫(あべのひらふ)」が「肅慎」という民族を討ったという話がある。北海道では「比羅夫」遠征の話は有名でニセコの羊蹄山付近に役所を置いたと信じている人もいます。それでは「肅慎」とは一体なんなのでしょう。いまだに読みですら「しゅくしん」「あしはせ」「みしはせ」と定まっています。

『日本書紀』に7世紀の中期、「阿部臣が東北の蝦夷と併に大河の側に至ると「渡嶋」の蝦夷1千人が宿営していた。その中の二人の使から「肅慎の戦舟がやってきて、我々を殺そうとしています」と訴えられた。阿部軍は共同してへ口ベノシマ(弊路弁嶋)へ渡り、合戦をして肅慎を討った」との記載があります。

「渡嶋」を北海道だと仮定すると統縄文時代から擦文時代への変換期にあたる北海道の在来文化人を「渡嶋」の蝦夷と呼んだのでしょうか。また、そうだとすると、その蝦夷と対立的な関係にあった肅慎を、オホーツク人だったのでは考えることもできます。

確かなことは言えませんが、『日本書紀』には、先史と有史の時代の狭間に生きた東北・北海道の民族の混乱・闘争の歴史が、ごくわずかですが刻まれているのかもしれない。



オホーツク文化の遺跡は、ほとんどが海沿いにあり内陸では見つかりません。オホーツク人が北海道に南下した当時、内陸には統縄文人、擦文人が生活しており、長期間、互いの領域を侵さず住み分けていました。です。で、互いに関係を持ちつつも、オホーツク人と北海道在来文化人との関係は

### オホーツク文化とは、なんだろう

友好的・親和的ではなかったようです。また、生活圏が海沿いであったことは、彼らの生業が海での狩猟・漁猟に特化していたことも影響しています。動物の歯牙を加工した様々な骨角器や銚漁を描いた道具の存在などから、海への適応性・依存性が高い文化であったことがうかがえます。

また、近年のDNA鑑定によって、オホーツク人はサハリン以外に東北アジア、ロシア沿海州、アムール川流域の人々と強いつながりがあることが明らかになってきました。これまでも、道内のオホーツク文化遺跡から大陸由来の青銅製帯飾や装飾品などが出土しており、大陸方面とつながりがあったことが推定されています。科学的な分析によりオホーツク人の本拠地や活動範囲などが明らかにされました。

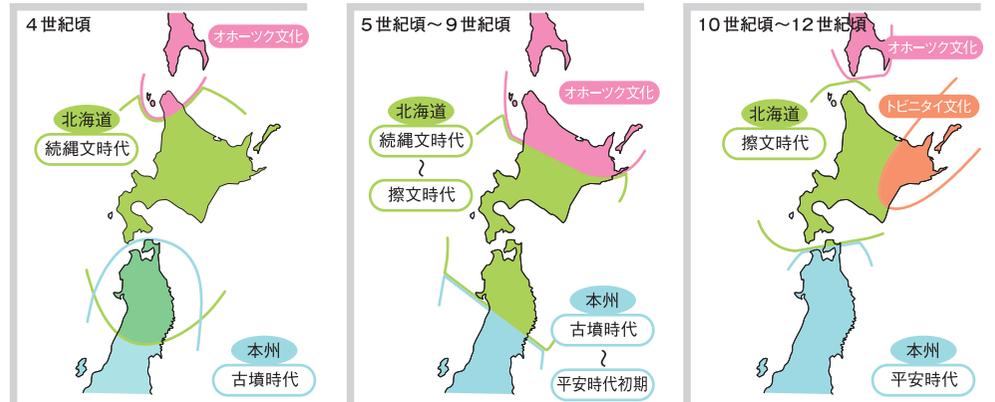


骨製帯留め

### 本州との交流が続く北海道に 北方から異民族が進出してきた

統縄文時代後期、北海道の統縄文人は東北北部までその活動範囲を広げていました。青森や岩手、秋田などのいくつかの遺跡からは、統縄文時代の土器やお墓が見つかっています。こうした中、サハリンからオホーツク人が、稚内や礼文・利尻など、北海道北端地域に南下し始めました。およそ5世紀前後のころと考えられています。やがて、オホーツク人は、日本海北部からオホーツク海沿岸へと生活圏を広げていきます。そして、北海道では統縄文文化・擦文文化とオホーツク文化というふたつの文化が併存する状況が9世紀ごろまで続きます。

擦文文化が古墳文化と濃密な関係を持っていたことは前述しましたが、オホーツク文化は北海道の在来文化、ひいては日本の在来文化とは全く異なる文化でした。例えば、住居の場合、縄



文時代では円形、古墳時代ではカマド付きの方形に対し、オホーツク文化の住居は五・六角形であり、その大きさも七・八人が同居できるほど大きなものです。

時代を経て本州では平安時代、北海道では擦文時代後期、北海道北部では9世紀後半、北海道東部では10世紀ごろを境に、オホーツク文化は衰退を見せ始めます。同時期に、擦文人の活動が北部や東部といったオホーツク人の生活圏まで進出するようになります。

先に擦文人と接触した北部では、住居の形が多角形から方形に変化し、擦文土器の影響を受けた土器が作られるようになるなど、オホーツク文化と擦文文化との折衷型文化へと変化していきます。東部では、擦文文化のさらなる影響を受けた結果、トビニタイ文化という融合文化を生み出します。これにより北海道内におけるオホーツク文化は消滅し、オホーツク人も擦文人と同化していったようです。



利尻富士町役場遺跡出土の初期・前期の土器

成果が得られています。

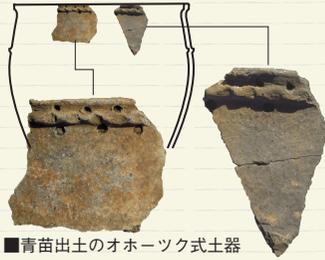


利尻富士町役場遺跡の土壌墓

【写真提供：利尻富士町教育委員会】

一方、利尻島では、亦稚貝塚や種富内遺跡、利尻富士町役場遺跡などにおいて、地元教育委員会や大学等によって発掘調査が行われています。中でも、利尻富士町役場遺跡では平成に入ってから二度の行政発掘が行われ、住居跡や墓などの遺構をはじめ、多量の遺物を伴う廃棄場など、離島部におけるオホーツク人の良好な生活痕跡を示す成果が得られています。

### 奥尻島で出土した土器片は 礼文島の土で出来ていた



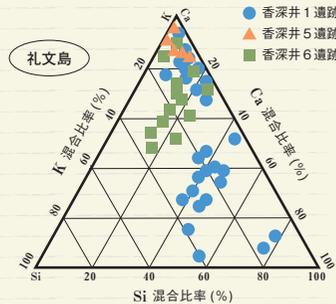
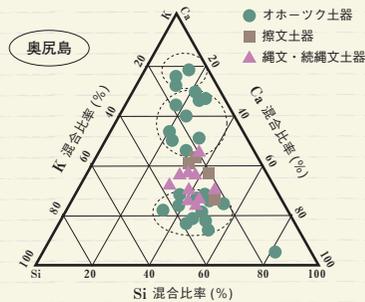
■青苗出土のおホーツク式土器

平成13年と14年に北海道埋蔵文化財センターによって、奥尻島青苗砂丘遺跡の発掘調査が行われ、オホーツク文化期の住居跡と思われる遺構が確認されたほか、千和田式や江の浦式といった前期から中期にかけての土器が数多く出土しました。これまでの例では、こうした土器の主たる出土地域は、日本海側では礼文・利尻であり、はるか南の奥尻島で出土し、しかも一定期間の居住を伴っていた可能性が報じられたことは大きな驚きでした。

さらに、これらオホーツク式土器に含まれる砂粒を分析した函館高専中村和之教授らの研究グループによって驚くべき調査結果がもたらされました。それは、青苗砂丘遺跡出土土器の1つのグループが、礼文島香深井5遺跡出土土器と同じ成分であったということです。奥尻の縄文土器等とは明らかに異なる成分であることから、奥尻のおホーツク式土器の一部は、礼文島で作られ運ばれた可能性が高いと考えられています。

【写真・図提供：函館工業高等専門学校 中村和之教授】

■ 礼文島・奥尻島の土器中砂粒混合比分析図  
Si(ケイ素)・Ca(カルシウム)・K(カリウム)



目梨泊遺跡の住居跡



オホーツク文化の主要な遺跡



目梨泊遺跡の土壌墓



目梨泊遺跡出土の青銅製帯金具

【写真提供：枝幸町教育委員会】

オホーツク文化の主な遺跡は、北海道北端部からオホーツク海に沿って広がっており、北は稚内から東は根室まで分布しています。特に稚内市周辺及び離島部から成り立つ北端部には、初期から中期にかけての遺跡が数多く見つかっており、これまで学術・行政両面から

### 北海道北部の オホーツク文化遺跡

の発掘調査が行われてきました。稚内市では、オンコロマナイ2遺跡や富磯貝塚、抜海岩陰遺跡などが古くから知られています。オホーツク海方面では、枝幸町の目梨泊遺跡やホロベツ砂丘遺跡、ウバトマナイチャシ跡などが知られています。中でも目梨泊遺跡は、中期から後期にかけての一大集落遺跡で、多数の住居跡のほか、蔵手刀を副葬した数多くのお墓も見つかっています。また、大陸製帯金具といったサハリン経由でもたらされた珍しい遺物も出土しており、学術的価値の高さからオホーツク文化の遺物では初めて国の重要文化財に指定されています。



包含層



住居跡



住居跡

平成九年から十年にかけて行われた道路敷地の発掘調査では、おホーツク文化初期と末期の包含層が確認され、複数の住居跡や集石遺構の確認、魚骨・獣骨などの廃棄ブロックの検出、末期に位置づけられる「元地式土器」の大量出土など、大きな成果があった調査となりました。

前期の住居跡は、粘土の貼床と炉を備えたもので、ほぼ方形をしており、中期以降に見られる五角形あるいは多角形の住居とは異なる形状でした。一方、末期の住居跡もほぼ方形をしていましたが、炉は備えていたものの明確な貼床は確認されませんでした。また、石器や骨角器などの生業に関わる道具

類や、玉などの装飾品も多く出土するなど、この遺跡の調査によって、礼文島におけるおホーツク人の始めと終わりの暮らしが明らかになりました。



## 礼文島のオホーツク文化遺跡

礼文島には現在 55ヶ所の遺跡が見つかっており、時代別では旧石器時代 1ヶ所、縄文時代 13ヶ所、続縄文時代 15ヶ所、オホーツク文化期 19ヶ所、擦文時代 12ヶ所、近世アイヌ文化期 7ヶ所となっています。なお、合計数が55ヶ所以上あるのは、1つの遺跡で複数の時代が重なっているためです。この内、近年発掘調査が行われた香深井5遺跡、香深井6遺跡、浜中2遺跡の成果を中心に礼文島のオホーツク文化を紹介します。

### 香深井5遺跡

香深井5遺跡は、礼文島中部香深井湾の南端に形成された砂丘上にあるオホーツク文化初期と末期の遺跡で、遺跡は現在の総合体育館周辺に広がっています。香深井地区全体では現在十ヶ所の遺跡が確認されており、船泊湾沿岸の遺跡群と同様に古くから知られ、明治二十二年刊行の東京人類学雑誌に掲載された「北海道遺跡地名表」の中に『北見国礼文郡カフカイ』があります。その後、昭和初期から四十年代にかけて考古学研究者や研究機関によって学術発掘が行われ、オホーツク文化の研究に大きな進展をもたらしました。



包含層



魚骨等廃棄ブロック

その後、平成に入り、総合体育館建設に伴う事前調査により、これまで知られていなかった新たな遺跡が発見されました。平成五年、礼文町教育委員会が発掘調査を行った結果、オホーツク文化前期に位置づけられる「十和田式土器」が多数出土しました。また、この調査を受け、香深井地区における道路の拡幅工事が予定されていた地域にて試掘調査が行われ、総合体育館前を通る道路敷地にも遺跡が広がっていることが確認されました。

## 香深井6遺跡

香深井6遺跡は、礼文島中部香深井湾のほぼ中央にあり、香深井1遺跡と香深井5遺跡という集落遺跡に挟まれ、背後の海岸段丘と海辺とのわずかな間に形成された砂地に営まれた遺跡です。この遺跡は、道道の拡幅工事のための試掘調査によって発見された新たな



魚骨等廃棄ブロック

な遺跡で、礼文町教育委員会によって、平成十年から十一年にかけて、旧香深井郵便局から香深井港取付道路までの道道及びその拡幅区間において発掘調査が行われました。



魚骨等廃棄ブロック断面



魚骨等廃棄ブロック

道路下以外の調査範囲は、近代以降の開発行為によってほとんど破壊されていました。道路下は比較的よく残っており、遺跡の北側では、多数の礫を集積させたオホーツク文化の集石遺構七基が見つかっています。一方、遺跡の南側では、近世アイヌ期の遺物をはじめ、擦文文化期の魚骨等廃棄ブロック、オホーツク文化後期の廃棄



## 浜中2遺跡

浜中2遺跡は、礼文島北部船泊湾の最奥部に形成された砂丘の西端にある遺跡です。浜中地区は、浜中1遺跡や神崎遺跡など同じ砂丘上に位置する遺跡や、後背の段丘上にある浜中3・4遺跡などがあり、礼文島の中でも遺跡が集中している地区の一つです。

浜中遺跡群の存在は古くから知られ、大正十一年に東京人類学雑誌において採集資料が紹介されたのが始まりで、昭和二十四年には、北海道大学医学部によって、現在の浜中1遺跡にて本格的な学術発掘が行われました。その後、昭和五十年代まで、大学や研究者などによって小規模な



浜中地区遠景

発掘調査が行われてきました。平成に入ると、筑波大学前田潮氏・立教大学山浦清氏を担当者とする行政発掘が行われ、最上層の近世アイヌ文化期の文化層から擦文文化期、オホーツク文化期、縄縄文化期と連続して堆積する様子が確認されたほか、オホーツク文化期の子どもの墓が多数見つかるなど大きな反響を呼びました。また、この調査を契機として、平成三年から九年にかけて大学や研究機関



包含層



土壇墓



円盤状骨製品



前期の土器

による学術発掘が継続して行われ、行政・学術両面による調査によって、浜中2遺跡は縄文時代中期以降、連綿と人が住み続け、旧石器時代を除く全ての時代が確認できる島内唯一の遺跡であることが判明しました。